# 『荒倉様』のおかげで

前田　典彦

## はじめに

「くろしお」第５号の時から電子版を作り、第６号の原稿をブログに載せている。載せる際に走り読みさせて頂く。いろいろ面白い。八月に三週間あまりクルーズや車で北・西欧を廻ったのでそれでも書こうかと思ったが、美女四人の訪仏記もあるので、一転して川村愿さんのミニ自分史に倣うことにする。

これまで自分史は書いたことが無い。誇張抜きに事実を書いても、競争試験、資格試験のすべてで一度も落ちたことはないとか、七つの国民学校、中、高、大の学校生活、三度の出向を含む官僚生活、退官後の五つの職場で一度も苛めを受けたことはないとか、一五を超える異なる仕事がすべて面白かったとか、これらを正直に言えば他人には自慢のように聞こえ、私が尊重して来た徳目の一つの謙譲の美徳に反するように見えるだろうと思ったからである。それでは何故気が

変わって書く気になったかと聞かれれば、老化が進んで耄碌し、恥知らずになったとでも言うしかない。

## 私が生まれるまで

父の荒亀は明治三十九年四月十八日、弘岡中の村の前田郁馬の六男として生まれた。小作人の郁馬は評判の働き手で若干の田地を持つに到った。祖母の寅は郁馬の先妻が三児を遺して逝った後、後妻に入り父を含む五児を産んだ。たいへんよく出来た人で、先妻の子が多額の借財をして入牢のおそれを生じた時、継子に冷たいと言われたくないと田地家財を売り払って与え、祖父一家は針木の山に開拓に入った。やがて梨作りを始め、新高梨開発の元祖の一人となった。その時、父は高等小学一年で弘岡周辺六か村で名を知られていたが、教科書を庭で焚いて高小を去り、組合長に世話になることになったと言う。これはよほど口惜しかったのか何度も聞いた。今の農協のような組合で雑用などしながら自活して少年後期を過ごしたのであろう。その後は、大正の頃米国の大型乗用車を輸入してバス事業をしていた会社に入った。時速百キロ出せる直線道路は仁淀川大橋しかなかったと言っていた記憶がある。

母の睦実は、明治四十年十一月一日、県立高女の教師をしていた藤原清太郎の次女として生まれている。彼は四十七歳で五児を遺して急逝したが、三十代で母校上ノ加江小学校の校長に内定し、同時に県立高女に招かれた時、将来帰郷して校長になるという約束で高知に出たと言う。早逝でこの約束は果たされなかったが、上ノ加江小学校には不相応に立派な謝恩碑が建っている。その妻つまり祖母の嶋は、四十歳そこそこから独りで五児を育て上げた。小さい地主で若干の米が入るとは言え、縫物をしながら一人息子は東京帝大を出させ、四人の娘の内二人は帝大卒に嫁がせた有能な人である。その意に添わなかった後二人の内、一人は入信してカトリックの尼となり後年はお供付、車付でないと外出できないほどエラクなったが、祖母は晩年、学歴も資産もない父と結婚した母を指して、結局『睦ちゃんが一番幸福』と言っていた。

このような変わった夫婦は、母の伯父が母を養女にし、父をその婿として後継ぎにしようとしたことでつくられた。母の話では、父は舅の意に反し養子の分際で平気で朝寝をし、起こしても起きないので困った由。その内、父は家を飛び出して養子縁組は破談となり、その伯父は別の養子を探して母と結婚させようとしていたところ、母も伯父の家から出て、中断はあったが父との結婚を続けたと言う。実母の兄たる伯父の顔を潰して家を飛び出し、父との生活を選んだのだから、

当時としては相当な問題だったことと思うが、父の母親や伯父の母（＝母の母）などの理解と支援により乗りきったそうだ。

この話には後日談がある。この私にとっての大伯父はその後養子を迎えず、三十年を過ぎて私が大学に入る時、再び私の父母に声をかけ、父は高知の家を売って私の学資とし、夫婦揃って祖父の家に入った。ところが父はまた飛び出して、今度は大伯父も諦めて別に養子をとって後継ぎにし、めでたしめでたしとなった。この大伯父とは大学の夏休みに帰って将棋を指した記憶があるが、別に気難しい人とも見えなかった。そもそも、私の親父のような人を養子にしようと思ったのが間違いだったことは間違いない。

さて、私自身の幸運の第一は、この世に無事生まれ出たことである。私を身籠った時二人の産科医は母に産むのをやめよと言った。妹の一人は生まれてすぐ死に、もう一人は死産だったので正しいアドヴァイスだったのだろう。しかし母は諦めず、第三の老医が「天からの授かり物だから産んでみよ」と言うのを頼りに、それまで口にしたことがない小鮒をせっせと食べて私が五体満足に生まれた。

幸運の第二は私の名前である。私は生まれる前に荒倉神社の契約氏子になっていて、名前は荒倉様がつけて呉れた。といっても実際につけるのは神主だろうが、荒亀の息子だから亀太郎でも、双方の荒を冠して荒太郎でも文句は言えないとこ

ろである。しかるに典彦という名前をつけて呉れたのは奇跡的である。典は台の上に書物が立てて並べられた形から古の五帝の経典、ひいては法則を示し、彦は立派な男子を意味している。（大字典）

## 生まれてから土佐中入学まで

もの心つくまで、母にどのように育てられたかは直接知りようがないが、長女を母に育てて貰ったのを見て推察出来る。母は六十歳を過ぎて左腕に力瘤が出来るほど長女を抱いていて、何も判らない新生児の時からいろいろと話しかけていた。最も多く繰り返される言葉はオリコ（お利口）である。私の場合を推察するに、とくに趣味もなく、親戚や近隣との付合いも少なく、私の眠っている間に済ませられないほどの家事もなかったであろう母は、私の前に常に存在し、私が不安になることはなかったに違いない。叱られた記憶はない。躾はあったようで、菓子は家に帰ってから食べるべきとされていたので、たまたま遊びに来ていた友達と一緒に駄菓子を買って貰い、その子がすぐに食べ始めたのが羨ましく、自分も食べたいのだが我慢しているうちに悲しくなって、「みっちゃん、道々食べるものじゃない」と泣いたという話を母から何度も聞かされた。

四歳の時、毎日小学生新聞を読んでいるということで新聞に載った。「弟に話したら『三歳四歳神童で、五つ六つが天才ではたち過ぎればただの人』と言った！」と母がえらく怒っていた記憶がある。何かからの引用であろうが至言である。私もその通りとなった。柳原幼稚園には何故か判らないが二学期から行き始めたが、秋には朝鮮の大田に移った。父は郡是製糸高知工場に勤めていて、本社から来た学卒の幹部候補生達をかわいがっていたようだ。大学入試の後その一人が工場長をしていた飯能に行き、たいへんなご馳走になったり、黒山三滝へ連れていって貰ったりした記憶がある。学歴なしの地方採用の父が大田工場へ転勤になったのは、相当な抜擢だったに違いない。

翌年、大田国民学校入学、その暮に太平洋戦争が始まる。その次の年の秋に、父が一夜たまたま『おたふく綿花』の社長と飲んで北京行きが決まった。当時日本屈指の大企業だった郡是を一方的に辞めたのは、学歴からみて同社内での将来を見切って新天地に賭けたのか、痛飲して意気投合しただけなのかいまだに判らないが、「北京へ行くぞ」の一言に母も私も異を唱える筈もなかった。当然、郡是とは揉めて、退職金は要らないとした父に、北京行きの特急『暁』に乗ろうとしていた大田駅でかなりの額が届けられた。

大田では特段の幸運と言うべき記憶はなく、平平凡凡の二年間だったが、近郊にある千米級の岩山に登ったり、近くの清流で漬け瓶で婚姻色の美しい鮠を取ったり、父と十分に遊ぶことが出来たのはこの時期だけだった。幸運と言うべきであろう。

北京では三度転居し、三つの学校に行った。常に新入りだったが、苛められた記憶はない。転校早々、学芸会の『海彦山彦』の主役にされて、ソロを歌った。『春爛漫の花咲けば、霞をわけて鳥の啼き、秋清冷の気の澄めば、山絢爛の錦着る』と『歌えや踊れ賑わしく、陸のあでびと迎えにし、この喜びにつつまれて、海の歌をば高らかに』との両方は今も正しい音程で歌える。どちらの役だったかは忘れたが大成功で褒めてもらった。一生に二度とない経験が出来たのは、前の主役が転校した穴に新入りの転校生を当てただけのことだが、幸運と言うべきであろう。

王府井では、大きな中庭を囲んで四棟がありそれを屋根付きの回廊で結ぶ伝統的な中国建築の家に住み、隣棟の社長宅に自由に出入りして、背丈を超える本棚の本を読みつくした。獅子文六の『胡椒息子』などはその年で理解できたかどうか疑わしいが、吉川英治の『三国志』や『宮本武蔵』などは諳んじるほど読んだ。

この我家としては豪華な生活は、山東省張店の郊外に国策会社華北軽金属が建設中の東洋一のアルミナ工場に父が徴用されて終る。四年生の秋、社宅が出来るまで一冬住んだ坊子は一～六年生でやっと一クラスになる五つ目の学校、その後五年生一学期を過ごしたのが建設中の社員の子供だけの六つ目の学校、いずれも記憶は薄い。

終戦の時父は警備軍に入れられて工場を離れていて母子二人だった。未稼働の大工場は八路軍の管理下に入り、社員家族は張店に移り引揚げの準備を始める。ある日、引揚げ列車が出るというので皆でそれに乗った。が、列車は動かない。匪賊が出たと言うのである。待つことしばし、今日は駄目だと言うことでいったんは捨てた宿舎に戻って来た。その晩、父が帰って来た。何たる幸運！予定通り列車が出ていたらどうなっていたか判らない。この後、半年近く宿舎で親子三人で住んだ。猛烈なインフレに見合った給料が払われ、生活には困らなかった。どこからか手に入った本を読んだが、ポーの『黄金虫』はたいへん面白く、『アッシャー家の崩壊』は流石に怖かった記憶が強い。

この間、国民政府軍と八路軍との戦いが続いていたようで引揚げ列車も出なくなっていたが、年明けて昭和二十一年の一月二十九日、零下二十度の中を社員とその家族百余名が挺団を組み、牛車を連ねて青島に向けて歩き出した。行程の大

部分は牛車を乗り継ぎ、一部は一輪車に荷物を託して人は歩き、一部は鉄道も使いながら三週間かかって全員無事で青島に着いた。夜は吹き曝しの厩舎の隅で高粱酒で腹から暖を取りながら寝たり、警備して呉れる筈の国府軍に時計や毛布を奪られたり、農民の襲撃に後尾の何台かが荷物をやられたりすることはあったが、挺団全体として幸運だったことは明らかである。私の牛車が襲撃から逃げようと走る中で横転したが、怪我をしなかったことは私個人としても大いに幸運だったと言うべきであろう。青島で三週間余り引揚船を待ったが、この頃でも父の給与がたくさん出ていて、綺麗なセロハン包の飴を幾缶も買って持ち帰った。高知に着くと今の上町一帯が焼け野原になっているのに、南奉公人町の母の実家のあたりの数軒が無傷で残っていたり、町角で鰤の配給をしていて引揚者と見るやたっぷり切り別けて呉れて祖母や叔父に喜ばれたなど、幸運が続いていた。

三月の末近くに帰国したのだが、ただちに上ノ加江に向かう。これも農地改革にあたり不在地主のままよりは誰か居た方がよいのではと考えた祖母達と、当面行くあてのない我家の利害が一致した幸運によるもので、永年家を貸していた遠縁の小作人が住んでいたところを半分にして我々を快く迎え入れてくれ、以後一年間仲良く住めたのも幸運であった。

学校の七つ目が上ノ加江国民学校で、一学年男女合わせて五十人くらいの小さな学校である。五年の二、三学期をやってないので、一年下の五年生に入れて呉れと言ったが、校長にが「謝恩碑の藤原先生のお孫さんだから」と言われ、否応なしに六年に入れられた。驚いたことに入った途端に級長にされた。これは全く有難くもないが人生唯一の級長である。何かしたかどうか、『起立』くらいは云っていただろうが全く記憶がない。

私が本当に幸運だったと思うのは、中国で自然と交わることが全くなかった不運を一気に取り返し、泳ぎ、潜り、鰻取り、蝦取り、つ蟹取り、鮎取り、筍取り、山芋取り、野鳥取り（随分やったが実際に取れたのは山鼠ばかりだった）その他、農業一般を一年で経験したことである。この一年は、フルブライト留学で米国で過ごした一年と並んで、私の一生で最も楽しかった年であった。泳ぎは父の背中で覚え、ゼロから浦戸湾口を泳ぎ切れるまでになった。蝦取りは土佐中で唯一他に擢んでいた特技で、鏡川はもとより、仁淀川や上ノ加江まで連れて行った友は多い。

もう一つの幸運は、クラス担任が栗山雲涛と号する書家だったことである。中学入試に備えて週に何夜か伺うのだが、教わるのはもっぱら書道、時には夜釣りだった。何故に特筆すべき幸運かは後述する。

## 土佐中・土佐高時代

学制改革で城東中学の入試が消えた後、土佐中が生徒を募集しているという話が聞こえてきた。汽車も着いてなく、卒業写真でみると私を除く全員が藁草履を履いているような僻地まで、この情報が応募に間に合うタイミングで届いたこと自体が幸運である。そして、生涯最初の試験に落ちなかったのはたいへんな幸運である。

卒業時のサイン帳に、ある女生徒が、「質問をされる時『イヤ先生』と必ず云った・・・」と書いたのを見て驚いた。『必ず』はオーバーだろうが、廻し書をするサイン帳に嘘を書く人は居ないだろう。とすると随分不遜な態度の生徒だったと思う。また別の女生徒は、私が授業中に度々『ハハン』という奇声を発していたと書き、ある男生徒は、「醸すという字が出た時君は『アア山田』と云って笑ったね」と具体的に書いてある。私自身は記憶にないということは、自分にとっては普通のことが、他人からみるとかなり奇矯な行動であったのであろう。それが、咎められも苛められもせず罷り通ったということは、よい先生、よい級友に恵まれた故であり、これも幸運と云うべきであろう。

中・高の六年間については皆様ご存知なので、後一つだけ挙げれば、書道部の創設から解散までの経験を得た幸運である。小六担当の栗山先生から、比田井天来の流れを汲む、上田桑鳩会長、森田子龍主幹の『研精会』を紹介され、入会したのは土佐中入学後である。ほどなく、大嶋校長の支援を得、漢文の吉本先生に顧問をお願いして書道部を創設した。記録がないが一年の終りか二年の初めに違いない。この書道部では集まって書くことはせず、部員は機関誌『書の美』の競書に規定に従って出品し、出来が非常に好ければ氏名の上に賞の字がついて、作品の写真と担当の著名書家の評が掲載される、出来がかなり好ければ氏名の上に○がついて昇級する、出来が悪くても氏名は載せられるという通信教育に参加するだけである。『書の美』は部数に応じて割引があり、それを利用して勧誘に努めたところ、部員は急速に拡大して七十名を超え、運動部、文化部を通じて人数としては最大の部となった。もちろん同級生が中心だが、二年生、一年生も少なくなかった。部員が増えたということは雑用が増えたということである。　高校に上がって進学が視野に入ると、雑用が勉強の妨げになるという感じが出て来て後継者を探したが見つからず、秋の高知大学書道展で金賞三名、入選九名の結果を出したのを置き土産に、書道部を解散した。

この経験を幸運と考えるのは、『研精会』でも大きな支部の長として中学生の身で役員欄に理事として栗山雲涛先生と名前が並ぶようになったからではない。後年顧みれば、プロジェクトを企画し、関係者を説得し、『雑用』をこなす経験が私の財産となったからである。会費を集め、機関誌を一括購入して配布し、出品作を集めて郵送する等々の雑用も、学年を跨いで部員が増えると一仕事である。さらに、中・高合同の予算会議で上級生と予算の分捕り合戦をしたり、紙、筆などの一括購入で部員の便宜を図ると同時に僅かの利鞘で活動資金を捻出し、『研精会』の本部から主幹で後に芸術院会員になる森田子龍に来て貰って研修会を開いたり、高知大学書道展という他流試合を実現させたりというような経験は、その後、大学や実社会で物事を進めるのに大いに役に立ったからである。

**大学から通産省卒業まで**

大学入試の当日受験票を忘れ、慌てて取りに帰ったが開始時間に間に合い事なきを得たのは幸運であった。通ったのは幸運ではなく当然だと今は思うが、滑り止めを全く受けず布団を東京に送ってはいたが、通知が来るまではやはり心配して、毎日ピンポンをしていた。

一年の秋の駒場祭では竹島（独島）問題をテーマにページェントを出した。最近の同窓会で、「君が企画、演出、主演をした」と言われて、古いアルバムを見たら中央で大手を広げている写真があった。

大学の後期課程で教養学科のイギリス分科に入れたのは幸運であった。アメリカ分科などで勉強のし過ぎで身体を壊す学生が続出し、その対策として設けられた正科のテニスとゴルフに精を出し、生涯でもっとも重要な精神と身体の健康の確保の術を得たのは大きい。教授達も入った大旅行、同級生有志だけの小旅行、ブリッジ等々は楽しかった。勉強の方は、小人数で先生を囲み自由に話す時間は楽しかったが、中身の方は後に『無用の用』と説明することが多かった。それでも、就職の面接は教養学科の説明だけしていればよかったのも幸運の一つかもしれない。この濃密な時間を共有した仲間は生涯の友となった。

官庁に入るなど全く考えても居なかったのに、母が受験料を出してやるというので公務員試験を受けることになった。このことは幸運、成績は実力というと言い過ぎかもしれないが、行政職の試験は常識で対応できた。論文は道徳教育論を書いたが、木村健康教授に相談したら、文部省はやめて通産省に道を開いて貰いたいと言われた。これはたいへんな幸運であった。文部省なら絶対勤まらなかったというのが妻と私の一致した意見である。通産省の採用責任者の秘書課長は、

後に三木大臣の時の次官で『佐橋大臣、三木次官』と書かれた大物で、珍しがられて採用されたのだろう、これは実力より運で、教養学科第一号となった。

役人は先例を重んじる。変えるとそれを決めた先輩に異を唱えることになることに気付かなかった私は、最初の仕事の通商白書でそれまでの統計を変えた。貿易統計には金額と数量の欄がある。石炭、小麦粉、鮭缶詰には意味がある。鉄道レールならまだ許せる。しかし、カメラやミシンにキログラムが単位の数字を入れて何の意味があるか、昭和三十二年以降このような数量の欄は空白になっている。これは判りやすい一例に過ぎない。でも、土佐犬と呼ばれはしたが、仕事がやり難くされたことはない。合理的で懐の広い通産省ならであった。

同じ課に山内家当主豊秋氏が嘱託で見えていたがたいへん親切な人で、て、運転免許を取れと進めて下さった。ペーパードライバーは詰まらんのでとお断りしたら、自分の車を運転させて上げるからと勧められ、取ることにした。これはたいへんな幸運であった。早速教習所に行き、最少の二十六教程・十三時間で一発で合格した。練習はトラックで試験はセダン、練習でどうしても出来なかったことがすっと出来たのは幸運か、シンクロナイズドギアのせいか？　その後山内さんは、私に運転させて助手席に座り私の家まで来て下さり、私が降りるとハンドルを取ってUターンして帰られる、私はそれを拝んでいた。車は古いオペルだっ

た。その車で日光へ行った。ハンドルは私、途中小雨が降り始めたばかりで、急加速した覚えもないのにスリップした気がしてブレーキを掛けたら、車が静かに滑り始め前後が逆になり、さらに廻って二百二十度くらいのところで道路から飛び出した。その時対向車が無く、道端の人家は途切れていて、種蒔きのためふかふかに耕した畠に落ちたので損害は軽微に止まった。少し後の話だが、新婚旅行は車で行き未舗装の日光裏街道を通って『塔のへつり』を見、磐梯スカイラインを楽しんだ後、松島で車の後輪が突然車軸ごと抜けてすべてのブレーキが利かなくなった。上り坂だったのでお尻から山に突っ込んで事なきを得たが、スカイラインの下りで同じことが起きたら、新婚で天国へ直行していたところである。その後、永年走っているがこのような故障はない。時に二百キロ出していたパリでも、渋滞で眠くなる日本でも無事故である。事故は自分が起こさなくても起きる。無事故は幸運のお陰である。先月の欧州でのドライヴは二十年余年ぶりで、しかも右側通行なので少々心配していたが、無事に千五百キロ近く走れた。少し、しんどかったけれど。

入省二年目に課長がフルブライト留学の受験を勧めて呉れた。尻込みしていると、「『下手の鉄砲数打ちゃ当る』は正しくなくても、『打たない鉄砲は当らない』は絶対に正しい」と尻押しして呉れた。これは幸運。合格したのも幸運。フ

ルブライトにもいろいろあるが全額米政府負担は芸術分野も含め年に三十二名、しかも、分野、出身大学、現住地ごとに割当があり、経済、東大、東京は一番難しかったが、何故か通った。英語力で通ったのでないことは間違いない。この英語力では米国へ行って困るだろうと合格者三十二名中、私と後一名だけがとくに指名されて月謝米国政府持ちで日米会話学院に行かされたからである。仕事柄、論文というほどではないが時々駄文を書いていて、官庁エコノミストの末席に名前が出ていたのが役に立ったのかも知れない。

ケネディ暗殺の後『古き良きアメリカ』は消えて行くが、その前に行けたのは幸運だった。善意に満ちた人達に迎えられ、泊めて貰った。田舎では、数十人が見に集まるというパンダ並みの扱いを受けたこともある。車を買えずに友人の車やレンタカーで一万六千キロ走った他、グレイハウンド、汽車、稀に飛行機も使って、帰るまでに四十四州に足を踏み入れたが、不愉快な記憶は思い出そうとしても出てこない。

帰国すると丁度日本経済が国際化する時代に入っていて、新設された国際経済室に入れられた、室が課になり部が出来るまで居て、雑用をこなした。その一つに『一目で見る日本』とでも訳すべき英文小冊子を、経団連に頼まれて作ったことがある。役所では集中できないだろうと、帝国ホテルのスイートルームに缶詰

めにされて後輩と二人だけで一気に書き上げ、経団連会長を団長とするミッションが持って行くのに間に合わせた。この冊子はその後、ミッションが出る度に利用され、仏、独、西、伊語版が作成された。こんなことで通商畑に七年居たが、一年以上米国で遊ばせて貰ったので文句は言えない。借りは返した。

その後は、化学産業、火薬、高圧ガス、金融、原子力、エネルギー政策、貿易交渉、産業立地、石油、貿易・投資保険、輸出信用交渉、コンピュータなど情報産業政策、総合産業政策の国際論議などを、東京とパリとで経験した。日本の経済力や国際的地位は急速に向上していた。族議員が強くなって来てはいたが、少なくとも通産行政においては官僚が主導し、もちろん実業は民間企業が行っているが、課長のレベルでもテクノクラートとして、経団連の会長以下幹部に直接説明するのが当然の時代であった。事の大小はあったが、自分が国益に貢献しているという実感が持てる仕事を続けられたのは、幸運の極みだった。

## 退官後現在まで

官僚の給与がまだ安く社会的地位が高かった時代が終わる前の八十四年に退官した。最初の仕事は情報サービス産業協会の初代専務理事。大企業や大メーカーの子会社の天下り社長と、ゼロから起業し急成長中の中小企業の社長連とは、全く

違う人種であった。典型的なのは交際費と政治献金の額や出し方だった。後者はなんとかまとめて協会に統一したが、よく言うことを聞いてくれたと今になって思う。会員名簿を作り、事務局の体制を固め、協会のロゴを協会で自製し、情報サービス産業白書を作るなど、立上げの忙しさと面白さを味わった。米国の同種団体と姉妹団体協約をまとめ、余勢を駆って韓国とも姉妹団体協約を締結した。先方は現代財閥の総帥の鄭会長がサインをした。爾来三十年、情報サービス産業協会は会員企業五百余社、その年商が九兆円に近付く大団体となったが、それを軌道に乗せたと言えるのは幸いである。

二年ほどでＳＲＩインターナショナルに移る。スタンフォード大学の附置研究所が独立・改称した米国第二の研究集団で、もろもろの知的サービスを売っていた。日本の国際化を支援し、そのお礼に贈られた寄付で建てた『経団連ルーム』が加州の本社にある。今度は天下りでなく、年俸相当額の費用をヘッドハンティング会社に払って二十余名の候補を探し、絞り込まれた二名を加州の本社で幹部総出で面接する米国的選考だったが、これに通ったのは幸運であった。年二千五百万円の三年契約で、オフィスは帝国ホテルのタワーにあった。ＳＲＩは公認の非営利団体だが、サービスを売って自活する必要があり、巨大銀行のシステム作

りやスリーマイル島の事故調査など、多種多様なサービスを売っていた。パソコンのマウスもその発明品の一つである。

面接時の話では、日米の懸け橋役とか好いことづくめだったが、実際には傾いた日本事業の立て直しのためのスカウトだった。電子政策課長の昔、ＳＡＲＩの調査を使ったことがあったが、私は通産省からは仕事は貰わなかった。朝七時に無人の事務所に入り、初年度は幸運にも日本事務所として売上倍増、利益五割増の実績を積んだが、趣味に合わない『商売』は一年限りとし、二年目は国際会議などをしていた。最終年は、通産政策の本を英文で書くつもりで、報酬を五分の三として週に三日働くことを提案して認めてもらった。『つもり』を一時は口にも出していたので、聞きつけたプレンティス・ホール社の編集者に口説かれたこともあったが、結局ゴルフの腕を上げるのに時間を使った。その時は怠惰に流れたことに若干の悔みがあったが、今から振り返ると『正解』だった。最後の仕事は、財界五輪と言われ四年に一度世界中から企業のトップが桑港に集まる世界産業会議に代表を送ることであった。初期には経団連会長以下財界トップが揃って出ていたが、討議に付いて行けず四年前には僅か六名と淋しい限りであった。ＳＲＩ本社はこの会議の共同事務局を務めており、私個人としても何とかしたいと思っていたので、旧知の大来佐武郎氏、椎名武雄氏の他、まだ数少なかった英語

の使える財界人に参加をお願いして廻った。最終的には小林陽太郎氏、茂木友三郎氏等二十名の参加を得て、そのうち七名がスピーカーを引き受けて下さった。ホンダの入交副社長にお願いしたら、奥様が土佐高出身とかで、誰か出すと即決、ホンダアメリカの吉野社長が話して呉れ好評だった。

三つめは、通産省が日本的経営を世界に広めようという、今顧みるとややのぼせた発想で国際ビジネススクールを創る仕事であった。ＡＰＥＣ大臣会議まで提案していたが、幸運にも、既存の大学等をネットワークして行うＡＰＥＣ人材養成事業に軌道修正がなされる。ＡＰＥＣ創設の翌年、まだＡＰＥＣが事務局を持たない頃、毎月二十万円のファックス代を使う『雑事一切』を担いでこの事業を立上げ、初代議長となり、四年後後継者を得て名誉議長となった。この人材養成事業ではいろいろな国際プロジェクトを立ち上げ、会議と合わせて毎年七回出張するのが十年続いた。

少し脱線するが、ＡＰＥＣ設立三年後に事務局が出来、その情報通信システムを作る専門家会議が開かれた。その場にユーザーを代表して押しかけ、専用回線至上主義の国際通信会社の専門家と闘って、ＡＰＥＣのシステムの端っこにインターネットを組み込ませた。その後二十年、この話が嘘のように聞こえる時代となった。

脱線もう一つ。日本航空のグローバル会員になって四十年近くなるが、累積搭乗記録が百八回、距離で三十三万マイル、月までの往復の七割という通知が来た。日航を使ったのは出張の半分くらいなので、通算の飛行距離はその倍くらいになるが、一度も怖い目に会ったことがない。これも幸運というほかない。

＊　ＡＰＥＣ人材養成事業の十年は当時私のライフワークと思ったほど面白いことが多かったが、長くなるので、最後の国際商事仲裁協会理事長の三年と併せて省略する。いずれも、幸運に恵まれ楽しかった。＊

## 家族と友人

父母については土佐中入学まで書いたが、その後を極端に端折って書く。父は私の大学一年の時上京し、超零細企業の司に入り、同店が赤坂に移り岸信作や佐藤栄作も来るような土佐料理店になり、さらに女将の死後廃業に至る少し前まで、ずっと経理を勤めていた。私が結婚する半年前に家を鳩ケ谷に建て、一緒に住んでいた大原町の借家を私に残して呉れた。母は私の娘二人をパリ勤務の六年間を除いて、ずっと育てて呉れた。退官の年、今の団地に十五倍の競争に当り、販売事務所へ行ったら権利落ちの二戸が無競争・同額で買えるというので即決し、父

母は同じ団地の庭付きの一戸に住むことになった。ちなみにもう一戸の大きい方には森下巌君が入り、後年ご両親も移り住まれて私の隣人となった。

父は脳梗塞で植物人間になって一年半、二十三年前に八十三歳で逝った。介護、看護の一切は母が独りでした。父の死後しばらくして母はたいへん元気になった。私は申し訳なく思い孝行しようとしたが、母の楽しみは帰高するくらいしかなかったので、羽田まで連れていって乗せた。当時は八十を超えた老人が独りで乗るのは珍しかったようで、全日空には大事にして貰った。三年前百三歳で永眠したが、その前一年余りはほとんど眠っていたので永眠との区切りは判らなかった。父の逝去の際も同様で、母がほとんど悲しまなかったように、母の死も私を含めて家族に大きな悲しみをもたらすものではなかった。他の肉親とも死別する悲しみを実感したことはない。外地など故郷と遠く離れていたためである。

結婚を前提としない『交際』はすべきでないとは何故か子供の時から思っていた。いわゆる見合い結婚はロマンがないし、官房秘書課に山積している候補は問題外、他方、三十歳までには結婚したいが忙しくてどうにもならないという二十代の後半、教授宅に大勢集まる新年会でたまたま今の妻に会った。忙しくてデートの時間が取れなかったが、同じ霞が関なので昼飯は食えた。結納を小切手で送って婚約。先方がユネスコ本部の研修生でパリに一年行ったので遅れたが、三十

歳になる前に結婚。その前に地獄の通商局から出ていて新婚旅行の時間も取れた。来年で五十年になる。二度のパリ勤務も、別居は赴任時と帰任時にそれぞれ約百日に止まる。二人共それぞれ好きな仕事が続けられ、十分面倒を見なかった娘達は独立心旺盛だが、私の母に曾孫を見せる孝行をした。

母に言わせれば、すべて荒倉様のお陰である。荒倉神社はトンネルが出来た今、旧道の傍に静かに建っている。

完